

「日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)」は、河川・流域再生に関わる事例・経験・活動・人材等を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい水辺再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的として、2006 年 11 月に(財)リバーフロント整備センターが設立した団体です。また、「アジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)」の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、同時に、アジアの素晴らしい取組みを日本国内に還元する役割も担います。

目次	Pages
➤ JRRN 活動報告	1
➤ 会員寄稿記事	3
➤ JRRN 会員・ARRN 関係者からのお知らせ	4
➤ 研究・事例紹介	5
➤ 会議・イベント案内	8
➤ 冊子・ビデオ等の紹介	8
➤ 会員募集中	9

巻頭書記

事務局のある東京はちょうど季節の移り変わりでしょうか。あたたかくなったり、また少し寒くなったり、様子を伺いながらも確実に春になる準備が進んでいるようです。こちら春を迎える準備が・・・残念ながら春にはほど遠く。今月末にはちゃんと一呼吸おいて、気持ちよく 4 月を迎えられるよう一踏ん張りです。

本号では、JRRN 事務局から「JRRN 活動報告 2010」の完成報告と「桜のある水辺風景 2011」写真募集につい

てお知らせするとともに、会員寄稿記事である「水辺からのメッセージ No. 22」をご紹介します。また、オーストラリアのクック川における河川再生についてご紹介しますのでご覧下さい。

事務局では、会員の皆様がより活用しやすい情報提供を目指してニューズメール、ホームページ等についても検討を行っていきます。お気づきの点がありましたら、お気軽にご意見をお寄せください。

JRRN 活動報告(1)

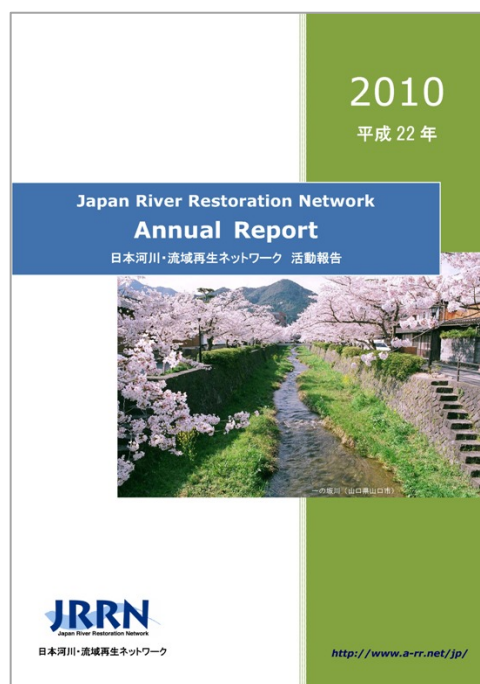
『JRRN 活動報告 2010』(日本語版)が完成しました

JRRNの設立4年目(2010年1月～12月)の活動報告を取りまとめた「**JRRN活動報告2010**」(日本語版)が完成し、JRRNホームページ上に公開致しました。

<http://www.a-rr.net/jp/info/letter/annualreport/>

本報告書では、JRRNの国内における活動報告に加え、現在JRRNが事務局を担うARRN(アジア河川・流域再生ネットワーク)の活動も合わせてご報告しています。年次報告を通じ、JRRNの1年間の歩みをご覧頂ければ幸いです。

また、『ARRN活動報告2010』については、ARRN活動及びARRNを構成する各国内ネットワーク(日本・中国・韓国)の活動報告を含め、3月中旬に英語版限定で公開致しますので、後日改めてご案内させていただきます。



(JRRN 事務局 和田彰)

JRRN 活動報告(2)

『桜のある水辺風景 2011』写真募集のご案内

JRRNでは、「桜のある水辺風景」の写真を募集いたします。

昨年、一年のうち春だけにしか見られない水辺風景の写真を会員のみなさまからいただき、「桜のある水辺風景2010」と題し、ホームページで公開しました。写真のタイトルと簡単なコメントが添えられた、春のにおいがあふれる23枚の写真が納められています。今、初めて耳にされた方は、下記のURLにアクセスしてみてください。

今年の桜の開花予想を見ると、沖縄では2月初めに満開を終えてしまっていますが、3月末から九州へと北上し、5月に北海道へ桜前線が到達することが予想されています。その地域だけの風景がきっとあると思います。

「桜のある水辺風景」写真が、さらに多くの方々の水辺への関心が高まるきっかけになることを期待し、全国各地の会員の方々からの「桜のある水辺風景」をお待ちしています。今年は、どの水辺のどのような写真が届けられるでしょうか。



◆『桜のある水辺風景2010』ダウンロード

<http://www.a-rr.net/jp/info/letter/publication/2192.html>

応募概要

○テーマ：「桜のある水辺風景 2011」

・2011年に撮影された写真であること

○応募資格：JRRN 会員または会員登録予定の方

○作品規定：

・応募はお一人何点でも可

・応募作品は自ら撮影したもの

○応募方法：

「**応募シート**」に必要事項を記載し、送付してください。

○応募期間：

平成23年3月1日(火)～平成23年5月31日(火)

○応募作品の取扱いについて：

・応募期間終了後に、JRRN ニュースレターや「応募写真集」上にてご紹介させていただきます。

○詳しい情報や応募シートはこちらから

<http://www.a-rr.net/jp/info/letter/information/2587.html>



(JRRN 事務局 沼田彩友美)

水辺からのメッセージ No.22

国土文化研究所 主任研究員 岡村幸二（JRRN 会員）

潮待ちの港“春の海”： 「日東第一景勝」と讃えられた鞆の浦に聞こえてくる瀬戸内の調べ



撮影：2009年3月（広島県福山市鞆の浦）

◆地域自らが主役となって

鞆の浦には古くからの町並みや港町のなごりが今なお保存されていますが、歴史観光の舞台として将来に引き継ぎ、地に足をつけて発展していくことが望まれます。

◆宮城道雄の“春の海”創作の舞台

『春の海』の初演は1929年日比谷公会堂で作曲者宮城の箏（そう）と尺八の演奏で行われました。

※国土文化研究所は、株式会社建設技術研究所のシンクタンク組織です。

■ JRRN 会員皆様からの寄稿記事を募集しています！

旅先で見かけた水辺の風景や思い、水辺再生に関わる様々な活動報告、また河川環境再生に役立つ技術等、JRRN 団体・個人会員皆様からの寄稿記事をお待ちしています。（JRRN 事務局）

JRRN 会員・ARRN 関係者からのお知らせ(2011 年 2 月提供分)

【JRRN 会員からの提供情報】

■『伊勢湾流域圏の自然共生型環境管理技術開発』(H18～22 年度) 研究成果報告会 (3/3 開催)

下記の研究成果報告会をご案内いたします。

- ・イベント名：「伊勢湾流域圏の自然共生型環境管理技術開発」研究成果報告会
- ・日時：2011 年 3 月 3 日(木)10:00～17:00
- ・会場：名古屋大学 I B 電子情報館
- ・主催：文部科学省振興調整費採択課題「伊勢湾流域圏の自然共生型環境管理技術開発 (H18～22 年度)」研究プロジェクト

※詳細は URL 参照：<http://www.errp.jp/>



【JRRN 会員からの提供情報】

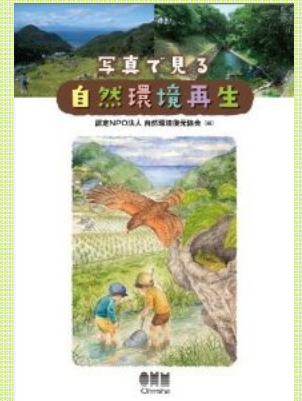
■「写真で見る自然環境再生」書籍案内

JRRN 会員で、認定 NPO 法人自然環境復元協会の運営委員の上原励様から新刊書籍をご紹介します。

自然環境復元協会 (NAREC) ホームページ内のチラシで申し込むと、**10%割引で購入できます。**

※詳細は以下参照

<http://www.narec.or.jp/>



【JRRN 会員からの提供情報】

■ミャンマー国イラワジ川の動画と写真紹介

JRRN 個人会員の DM 様より、ミャンマー国を流れるイラワジ川に関する動画と写真をご提供頂きました。

◆詳細は以下参照

<http://www.a-rr.net/jp/exchange/news/2565.html>



【JRRN 会員からの提供情報】

■「河川文化を語る会」

JRRN 団体会員である社団法人日本河川協会から「河川文化を語る会」のイベント案内です。

【第 154 回】

◆テーマ：「両河の賜物～ユーフラテス河とティグリス河が育んだ古代メソポタミア文明」

◆講師：小林登志子氏 (NHK 学園 古代オリエント史講座 講師)

◆日時：2011 年 3 月 15 日 (火) 18:00～20:00

◆場所：厚生会館 (全国土木建築健保)

<http://www.a-rr.net/jp/exchange/event/2487.html>

【第 155 回】

◆テーマ：「地球規模から流域規模の水のうごきを観る科学技術」

◆講師：小池俊雄 (東京大学大学院工学系研究科教授)

◆日時：2011 年 4 月 22 日 (金) 18:00～20:00

◆場所：厚生会館 (全国土木建築健保)

<http://www.a-rr.net/jp/exchange/event/2572.html>

【海外からの情報提供】

■「2011 年 International Riverprize 応募開始」案内

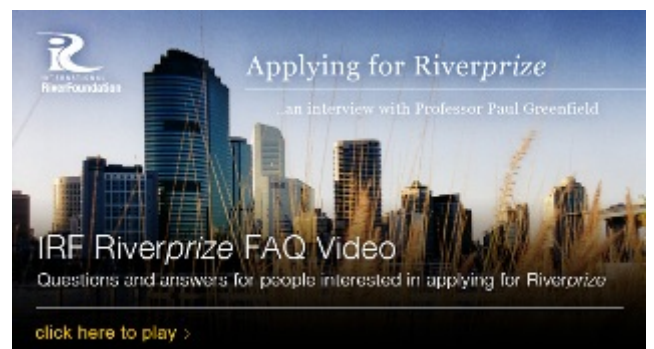
河川再生に関わる名誉ある賞として世界的に認められている「国際河川賞 (International Riverprize)」の今年の応募締切まで 6 週間を切り、応募者へのガイダンスを目的とした動画 (約 10 分・言語：英語) の案内が届きました。(応募〆切：2011 年 3 月 30 日)

◆応募方法等の詳細は以下参照

<http://www.a-rr.net/jp/exchange/news/2575.html>

◆国際河川賞 (International Riverprize) 概要

<http://www.a-rr.net/jp/info/letter/publication/2415.html>



研究・事例紹介

オーストラリア国シドニー近郊を流れるクック川(Cooks River)再生事例の紹介

【1】はじめに

海外の河川・流域再生事例として、オーストラリア・シドニー郊外を流れるクック川（Cooks River）を紹介致します。

オーストラリアでは 2001 年より、国内の優れた河川・流域再生事例に対し「河川賞」が政府より授与され、本号でご紹介するクック川は、2010 年の最終選考 5 河川の一つとしてノミネートされたものの、残念ながら受賞を逃した河川です。しかし、これら 5 河川の中でも、河川の規模や課題の特徴、更には再生活動の内容、仕組み等について、特に日本の河川に類似し、また参考になる印象を受けましたので、ご紹介させていただきます。



クック川の流域全体図（右下はシドニー空港）



現在のクック川の様子

【2】クック川について

クック川（流域面積 100km²）は、オーストラリア最大の都市・シドニーの南西部に位置し、シドニー空港のすぐ南側をかすめて海へと流れ込む都市河川です。19 世紀前半から農業や畜産業を主とした流域開発が行われ、その後工業化と激しい都市化が進んだ結果、かつての植生の消滅、また生活排水や工場廃水の流入による水質汚濁など、長きに渡り劣悪な河川環境に悩まされてきました。

クック川流域内には人口約 50 万人が居住し、また 10 万を超える商業・工業施設が立地しているため、水質の悪化、ゴミの不法投棄、コンクリートや矢板による河岸の人工化、乏しい生物多様性、川底への重金属残留、水辺の資材置き場としての利用など、様々な都市河川共通の問題を抱え、これらはクック川の景観を損なう原因にもなってきました。加えて、流域内の土地利用や天然資源の管理には、13 の自治体、17 の州政府機関、二つの連邦政府機関と多数の土地所有者が関与していますが、連携のための法制度が整備されておらず、持続的な流域管理や環境保全を推進する上での障害となってきました。



マングローブ林に溜まったゴミ（2004 年頃）

【3】河川再生に向けた取組み

1970 年から 1980 年代にかけて、州政府が導入した厳しい環境規制により工場廃水が飛躍的に削減されるとともに、水辺へのアクセス性向上を目的として、地元自治体が、かつての川沿いのごみ集積場を遊歩道や自転車道へと整備し、またコンクリート護岸沿いに植生を施すなどの取組みを積極的に行いました。また 1990 年代半ばには、州政府の支援を受けたクック川流域内の複数の自治体が、クック川流域の生態系、親水性、社会価値をより高めるための水辺公共空間の再生に向けた計画づくりに共同で取り組み、1997 年に「クック川水辺戦略計画 (Cooks River Foreshores Strategic Plan)」を策定しました。この計画では、地域計画と整合を図る形で、クック川流域の水質、護岸整備、親水性、生物多様性、文化伝承、地域教育、住民参加など多岐に渡る管理の方向性が示され、1998 年にはこの計画を遂行するための調整役として「クック川水辺ワーキンググループ (CRFWG: Cooks River Foreshores Working Group)」が組織されました。



水際の自然再生



地域住民による植樹活動



矢板撤去工事（上）と撤去後の護岸（下）

現在 CRFWG は、地元自治体、州政府機関、大学等と協力し、8 つの小流域協議会で構成され、クック川再生に向けた関係者間の調整を図りながら、資金確保を含む様々な共同事業を推進しています。具体的には、水質改善を目的としたゴミの除去装置や生物を利用した雨水の濾過装置の導入、また自然環境の再生に向けては、護岸の多自然化、湿地の再生、灌木再生、魚道整備、地域限定種の繁殖等を行い、これら活動の効果を検証するため、水質や生物の生息・生育環境の変化も継続的にモニタリングしています。さらに、クック川周辺の地域活性化のため、水辺へのアクセス性向上や親水施設の整備、地域教育や住民参加行事の催行などにも取り組んでいます。

これら再生に向けた諸活動の財源は各協議会、州及び連邦政府機関から出資され、またその担い手には専門家に加え、流域内の多数の地域ボランティアが参加しています。



小流域単位の計画策定活動



川の学習ツアーの様子



地域の川を説明するモニュメント

【4】河川再生のこれから

クック川の更なる水質改善に向けては、湿地再生や雨水貯留型公園・庭園整備など、河川に流入する栄養塩を低減し生物濾過作用を適用した流域レベルでの保

水力向上の取り組みを推進しています。また、ここ数年では、州政府の資金援助のもと、協議会メンバー、専門家が各自治体職員とともに小流域レベルの管理計画を共同で策定し、流域全体でのプログラムを各現場へ確実に浸透させるための取り組みを続けています。この中では、地域ボランティア主導で地域のあらゆるステークホルダーのための川の学習ツアーを企画するなど、地域が主体となってボトムアップで河川の健全化に取り組むプログラムを実施しています。

こうしたクック流域全体での活動の発展を受け、2011年7月からは、CRFWGがより権限と資金力及び職員数を持つ新たな公的組織へと再編されることが決まっており、この新組織を通じ、流域全体及びそれを構成する小流域レベルが更に連携したクック川再生の取組が行われていくとのことです。

【5】おわりに

今回の事例紹介に際しては、先に紹介したCRFWG(クック川水辺ワーキンググループ)の常勤調整役であるJudy Pincusさんより活動写真や関連資料等をご提供頂きました。Judyさんは、約30年前に東京でお勤めされていた関係で、当時の水質が悪化した隅田川や日本橋川を鮮明に覚えており、現在の川の様子を写真でお見せしたところ、その変化に驚かれました。河川再生の取り組みを評価するには、半世紀スパンの歩みを理解することの大切さも改めて感じた次第です。

最後に、本稿の作成に当たり情報提供にご協力頂きましたCRFWGに謝意を表します。

※クック川についての情報は以下からも入手することができます。(言語：英語)

◆「第13回 International Riversymposium」講演資料

http://www.riversymposium.com/index.php?element=T_s2_A2_Cooks+River.pdf

◆The Cooks River ポータルサイト

<http://www.canterbury.nsw.gov.au/www/html/170-cooknet--the-cooks-river-portal.asp>

(JRRN 事務局 和田彰)

会議・イベント案内（2011 年 3 月以降）

（ARRN・JRRN 主催・共催の会議・イベント）

■2011 年の「JRRN 河川環境ミニ講座」を企画中

2011 年に開催する「JRRN 河川環境ミニ講座」を現在企画中です。是非聞いてみたいという講師や、関心のあるテーマがございましたら、JRRN 事務局までご意見をお寄せ下さい。（info@arrn.net）

※過去の開催報告はこちらから→ <http://www.a-rr.net/jp/info/letter/eventreport/>

■2011 年の ARRN「第 8 回水辺・流域再生に関わる国際フォーラム」は秋頃に東京にて開催予定

本年度 8 回目を迎える ARRN 国際フォーラムは、2011 年 10 月～11 月頃を目標に、4 年ぶりに東京を会場に開催の予定です。プログラム概要が決まり次第、皆様にお知らせします。

※過去の開催報告はこちらから→ <http://www.a-rr.net/jp/info/letter/eventreport/2326.html>

（その他の河川再生・河川環境に関する主なイベント）

■「伊勢湾流域圏の自然共生型環境管理技術開発」（H18～22 年度）研究成果報告会

○日時：2011 年 3 月 3 日（木） 10：00～17：00

○会場：名古屋大学 IB 電子情報館

○主催：伊勢湾流域圏の自然共生型環境管理技術開発研究プロジェクト

<http://www.a-rr.net/jp/event/03/2554.html>

■土木学会関東支部第 38 回技術研究発表会特別講演～水辺からの都市再生

○日時：2011 年 3 月 10 日（木） 15：10～16：40

○会場：法政大学市ヶ谷田町校舎

○主催：（社）土木学会関東支部

<http://www.a-rr.net/jp/event/04/2559.html>

■第 154 回 河川文化を語る会

○日時：2011 年 3 月 15（火） 18:00～20:00

○会場：厚生会館（全国土木建築健保）

○主催：（社）日本河川協会

<http://www.a-rr.net/jp/event/03/2486.html>

■河川汽水域環境に関するワークショップ

○日時：2011 年 3 月 25 日（金） 13:30～17:00

○会場：メルパルク東京 5 階瑞雲

○主催：国土交通省国土技術政策総合研究所

<http://www.a-rr.net/jp/event/03/2589.html>

■第 155 回 河川文化を語る会

○日時：2011 年 4 月 22 日（金） 18:00～20:00

○会場：厚生会館（全国土木建築健保）

○主催：（社）日本河川協会

<http://www.a-rr.net/jp/event/03/2573.html>

■2011 年度川に学ぶ体験活動全国大会 in 鶴見川流域

○日時：2011 年 9 月 17 日（土）～19 日（月）

○会場：慶應義塾大学 日吉キャンパス等

○主催：川に学ぶ体験活動全国大会 in 鶴見川流域実行委員会

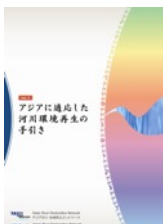
<http://www.a-rr.net/jp/event/03/2574.html>

冊子・ビデオ等の紹介

■ アジアに適応した河川環境再生の手引き ver.1

（2009.3 発刊）

- ・ 発行：アジア河川・流域再生ネットワーク（ARRN）
- ・ 価格： 無 料



ARRN が今後作成を目指す「アジアにおける河川再生技術指針」の入門編として、非専門家の方々にも河川再生の意義やアプローチを理解して頂くことを目的に、写真や図を主体に平易な解説文を添えて作成致し

本手引きをご希望される方は、「（財）リバーフロント整備センター企画グループ」までご連絡ください。送料のみご負担いただいた上で、無料で提供致します。

電話：03-6228-3862 / Fax：03-3523-0640

■ 自然と共生した流域圏・都市の再生（2010.12 発刊）

- ・ 監修：丹保憲仁
- ・ 編著：「自然と共生した流域圏・都市の再生」ワークショップ実行委員会
- ・ 出版社：技報堂出版
- ・ 発行年月：2010 年 12 月
- ・ 価格：¥ 2,940 円（税込）
- ・ ISBN：978-4765517744



第 4 回から第 8 回までの「自然と共生した流域圏・都市の再生」ワークショップでの講演内容とともに、「流域から都市・地域環境の再生を考える」をテーマとした座談会の議論をまとめたものです。

会員募集中

■ JRRN の登録資格（団体・個人）

JRRN への登録は、団体・個人を問わず**無料**です。
市民団体、行政機関、民間企業、研究者、個人等、
所属団体や機関を問わず、河川環境の整備・改善に携
わるすべての方々のご参加を歓迎いたします。

■ 会員の特典

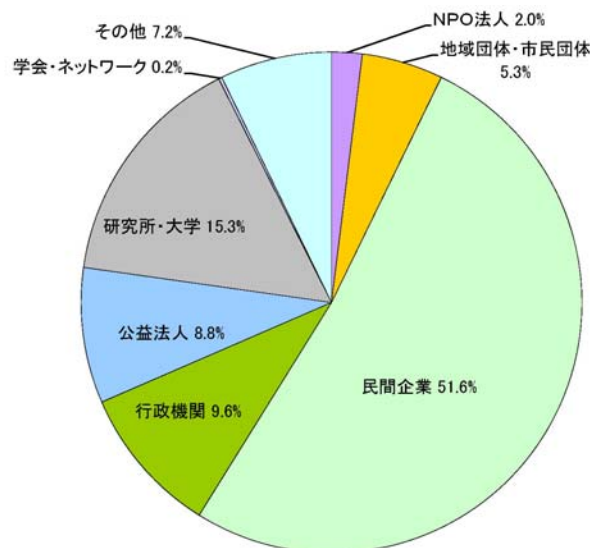
会員登録をされた方々へ、様々な「会員の特典」を
ご用意しています。

- (1) 国内外の河川環境に関するニュースを集約した
「JRRN ニュースメール」が週に 1 回～2 回メール
配信されます。
- (2) 国内外のセミナー、ワークショップ等の開催情報が
入手できます。また JRRN 主催行事に優先的に参加
することが出来ます。
- (3) 必要に応じた国内外の河川再生事例等の情報収集
の支援を受けられます。
- (4) JRRN を通じて、河川再生に関する技術情報やイベ
ント開催案内等を国内外に発信できます。
- (5) 韓国、中国をはじめとする、ARRN 加盟国内の河川
再生関連ネットワークと人的交流の橋渡しの支援
を受けられます。

■ 会員登録方法

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a-rr.net/jp/info/member.html>



2011 年 2 月 28 日時点の個人会員構成
(個人会員数：478 名、団体会員数：29 団体)

JRRN 会員特典一覧表(団体会員・個人会員)

JRRNが提供するサービス		JRRN 団体会員	JRRN 個人会員	非会員 (一般の方)
1	ホームページへのアクセス及び各記事へのコメント入力※1	◎	◎	◎
2	ホームページ「イベント情報」欄でのイベント掲載※2	◎	◎	◎
3	ニュースメール(週2回)の配信※3	◎	◎	×
4	Newsletter(毎月)及び年次報告書(年1回)等の発刊案内メールの配信※3	◎	◎	×
5	JRRN/ARRN主催行事の優先案内・優先参加※4	◎	◎	×
6	国内外の河川再生関連情報・技術収集や専門家・組織紹介の支援※5	◎	◎	×
7	ホームページ「最近の話題・ニュース」及びニュースメール「会員提供情報」欄で 団体が関わる行事や出版、技術や製品等の案内の掲載※6	◎	△※7	×
8	ホームページ「会員登録」「人・組織のつながり」欄及び年次報告書内で団体 名の掲載	◎	×	×
9	ARRN活動に関連する英語ニュース(ARRN Newsletter等)の不定期配信※8	◎	×	×
10	JRRN及びARRNが保有する国内外専門家・団体等との連携等の支援※9	◎	×	×

【発行・問合せ先】



日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局
財団法人リバーフロント整備センター 内
〒104-0033 東京都中央区新川 1 丁目 17 番 24 号 新川中央ビル 7 階
Tel:03-6228-3862 Fax:03-3523-0640 E-mail: info@a-rr.net URL: <http://www.a-rr.net/jp/>

※JRRN 事務局は、「アジア河川・流域再生ネットワーク構築と活用に関する共同研究」の一環として、
(財) リバーフロント整備センターと(株) 建設技術研究所が運営を担っています。